

『神聖喜劇』における大前田軍曹像

——大西巨人旧蔵書調査の成果を踏まえて——

橋 本 あゆみ

一、『神聖喜劇』における『保元物語』引用の重要性

『神聖喜劇』の全編を通して、大前田文七軍曹は新兵の教育掛を任じられた戦地下番下士官として、主人公・東堂太郎二等兵と真つ向から対峙する重要な登場人物である。彼について言及した先行研究・評論は、大きく二つの方向性に分けられるようである。

一つは、大前田軍曹の言動や表情の描き方が、小説によって「庶民」を描く取り組みの中で注目すべき達成だという意見だ。たとえば小田切秀雄は、全編完結した一九八〇年の評論で「大前田という下士官の個性の表現が日本文学中に比類少ないほどに豊かですばらしい」と、抽象的ながら非常に高い評価を与えている⁽¹⁾。

この「個性の表現」と重なりあう内容を、日高晋が詳しく述べている⁽²⁾。日高は「登場人物は、総じていわゆる肯定的人物像と否定的人物像に分けられるわけですが、大前田はどちらにもまたがっていて、まさに一個の動かしがたい人間そのものという形でわれわれに示されている。」と述べた上で、大前田の人物像

について簡潔に見解を述べる。

〔…〕便宜的に分けてみて、大前田の否定的側面ということから考えてみますと、まず第一に、冒頭に出てくる残酷性があります。〔…〕

さらにそれに加えて、未解放部落出身者とか、刑法の対象になったことのある人間に対して強い差別感情を持つている。〔…〕

肯定的側面を考えますと、一種の公平な態度があります。〔…〕あるいはまた、照準教育のさいでも東堂のいうとおりだということがわかると、たちまち自分の怒りを撤回して東堂を容認するというような、好ましい公平さがある。

このような同時代評は、大西自身が『神聖喜劇』の主要な作意の一つとして語った「一個の人間における「二律背反」的要素・明暗両面の同居を表現するということ⁽³⁾」とも一致し、大前田軍曹像を考える基礎となる。ただ、小田切が先の評論で「女性問題での失策と逮捕というだけのことによってしまった」と拍子抜け

し、篠田一士が「この長い長い小説に決着をつけるために、あそこで大前田を本土の拘禁所へ送ってしまったのではないか、少し早手回しなやり方じゃなかったかという気がします。」と当惑しているように、とりわけ第八部第四「面天奈狂想曲」の大前田像は、先行批評では捉えきれないという問題がある。

もう一つの流れは、大前田が中国大陸での凄惨な経験をもとに「余計殺して余計分捕ったほうが勝ち」という実際の戦争観を語る場面や、彼の見事な野砲操作に東堂が「男性的壮麗」を感じて惹き付けられる場面に注目し、東堂の立場に沿いながらその陥穽を問うものである。この例としては、大前田の野砲操作に魅せられ自ら名砲手となることは「東堂の身体が軍隊において要請されている規律の元に置かれたことを示している」と指摘した栗原丈和の論文や、最近では東堂における「暴力への愛」と、言論を「暴力の相関物」すなわちオルタナティブにする試みに着目した石橋正孝の論考がある。この着眼は、東堂の軍隊・戦争批判がいかに大前田的なものを持ち越え得るのかという、よりテーマ論的な色を帯びる。その一例である立野正裕の二つの論文から、一節ずつ引用する。

だが、近世理想純粋主義的武士道を体現する村上少尉と、中世武士道の現実主義を体現する大前田軍曹を目的の当たり道として、東堂は「私は、この戦争に死すべきである。」という命題そのものが、かえって唾棄すべき利己主義の変種であり、「人間としての儉安と怯懦と卑屈と」以外の何物でもないのかもしれぬ、という疑惑に改めてとらわれる。それは、

村上と大前田の二人が、東堂に、自分の内的な憧憬に合致し共通するかに思われるものを看取させずにはおかないからである。⁽⁷⁾

東堂は、大前田の「勝てば官軍、負ければ賊軍」式のリアリズムにはとうてい賛成し得ない。にもかかわらず、彼のその演説のリアリティに心を奪われないわけにはいかない。

「分の敵を討って非分の者を討たず。」という『保元物語』の為朝の姿と大前田とを重ね合わせることで、大前田の演説内容の意味論的吟味を宙づりにし、それをむしろ美的見地から共感を持って受けとめているようなところさえ東堂にはある。砲手としての所作がそうであるように美的なもの、戦場の凄まじい経験談がそうであるように現実的なものと、二つながらの圧倒的な力(リアリティ)の大前田における顕現を前にして、東堂がしたたかによるめくかかとさえ読者の目には見えるのである。⁽⁸⁾

立野による大前田軍曹および彼と東堂の関係性の分析は、概ね正当であろう。しかし、引用後半で展開される『「保元物語」の為朝の姿と大前田を重ね合わせること』が「大前田の演説内容の意味論的吟味を宙づりに」する——すなわち大前田の発言の説得力を疑わない——レトリックであるという判断は、いささか早計ではないかと思われる。

というのも、当該の第二部第四末尾の場面を確認すると、東堂は「たしか「内地じゃ一人殺した覚えもない」にちがいなかる

う大前田文七の「殺す相手は、日本人じゃない、毛唐じゃろうが？敵じゃろうが？」は、「幼少より不敵にして、兄にも所をおかず、傍若無人なりし」八郎御曹司の「分の敵を討つて非分の者を討たず。」に相当する言いつてもあるのか。」と、為朝の連想を通じて、敵・味方の二分法により戦場での殺人を正当化する大前田の言説を、あくまで「言いつ」と突き放し疑問に付してもいいからである。

また、大前田軍曹と『保元物語』の鎮西八郎為朝との重ね合わせは、立野が言及した場面だけでなく、関係の深い『平治物語』引用も含めると、『神聖喜劇』の終盤までに大小七ヶ所にも及ぶことにも注目すべきである。大前田に対してのみ繰り返され、強調されたこのイメージには、小説全体を貫くより複雑な意味が付与されているのではないだろうか。

そこで本論文では、先行研究の第二の流れを継ぎつつ、これまで引用の意味が明らかでなかったこともあり重視されなかった『保元物語』引用を、大西巨人旧蔵書調査で得た新たな資料をもとに分析する。さらに、それに基づいて大前田軍曹論を展開し、先行研究の第一の流れが解釈しきれなかった彼が迎える結末の意味をも考察することを目標とする。

七つの『保元物語』『平治物語』引用箇所については、論文末尾の表にまとめて概要を示した。引用した立野論文が取り上げていた場面は、この表のうち場面Aのみである。

他の引用部の検討に入る前に、大西巨人が参照した『保元物語』『平治物語』の底本について確認しておく。二〇一四年夏から複

数の研究者と共同で行っている大西巨人旧蔵書調査の結果、所持が確認できたのは佐伯常麿校註『校註 日本文学大系 第十四巻』（国民図書株式会社、一九二五年八月初版本）と永積安明・島田勇雄校註『日本古典文学大系31 保元物語 平治物語』（岩波書店、一九六一年七月初版本）の二種類であった。

このうち国民図書株式会社版の『保元物語』掲載部分には、大西がよく用いる薄紙の葉が計六箇所挟み込まれていた。うち、二八―二九頁「新院御所各門々固めの事附軍評定の事」は場面AとB、四〇―四一頁「白河殿義朝夜討に寄せらるゝ事」は場面F、一〇〇―一〇一頁「為朝生捕り流罪に處せらるゝ事」は場面Gに引用されている。また一〇二―一〇三頁「為朝鬼が鳥に渡る事並最後の事」は場面Aで引用されるほか、場面Eも大島配流以降の伝説を踏まえたもので、執筆にあたり大西は国民図書株式会社版を参照した可能性が高い。なお国民図書版の底本は流布本系統で、「為朝鬼が鳥に渡る事並最後の事」が最終章である（『日本古典文学大系』は金刀比羅本を底本とし、鬼が鳥の挿話はない）。

この国民図書版の尾上八郎による解題からは、「兄義朝の兜の星を射削つて、寶莊殿院の方立に大矢を留めたり、配流せられても落胆せず、公家から賜はつたといつて、鳥々を討ち従へて、鳥王となつて居る気持などは、英雄児の風貌が突々として、甚だ痛快である。」という、一九二五年刊行当時における源為朝のイメージが見て取れる。また引用一覧表における場面BとFでは、超人的な腕前で矢を射る為朝と、見事に野砲を扱う大前田が、優れた飛び道具の使い手という点で結ばれ、審美的にも優れたものとし

て印象づけられており、『保元物語』の為朝を「英雄児」として受容する戦前・戦中の傾向¹⁾とも重なるといえよう。

ただ留意しておきたいのは、『保元物語』の源為朝が、「英雄」とはいえ決して品行方正な人物像というわけではないことである。次節以降では、残る場面C→EおよびGの『保元物語』『平治物語』引用部の検討を通じて、大前田軍曹が語り手Ⅱ東堂によつてどう語られているかと、それが小説の展開に果たしている効果について論じる。

二、アウトサイダーをも取り込む戦争 ——村上少尉との対峙の意味

鎮西八郎為朝の形象において特徴的なのは、物語開始以前の彼が正統的な父子・主従の序列を逸脱したアウトサイダーであることだ。前節で検討した場面Aにも引用されていた「新院御所各門々固めの事附軍評定の事」で叙述されている、保元の乱以前の為朝の来歴について、再度確認しておこう。

〔…〕幼少より不敵にして、兄にも所をおかず、傍若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば、悪しかりなんとて、父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに、豊後国に居住し、〔…〕君よりも賜はらぬ九国の総追捕使と號して、筑紫を従へんとしければ、〔…〕十五の歳の十月まで、大事の軍をする事二十餘度、城を落す事数十箇所なり。〔…〕不孝すなわち父からの勘当にあつて渡つた九州で、為朝は官職を僭称し、当地の有力者と干戈を交えるにとどまらず、その「狼

藉」「梟悪」を見かねた朝廷が出した召喚の宣旨をも無視した。このために父為義が官職を解かれるに及んで、「親の科に当り給ふらんこそ浅ましけれ。」と為朝はようやく上京し、たまたま動乱に居合わせることになる。

為朝にとって朝廷とは、官職を騙り利用する程度には權威を認める一方、一族に害が及ばないうちは軽視できる存在である。松尾葦江は、「血気の勇者」と結末で評される流布本の為朝について、「武芸も勇猛心も前代未聞でありながら、「下として礼に背き、挫折した勇者なのだ。」といい、さらに「引用注…古態本の一つである」半井本は率直に為朝の規格を外れた言動に目を瞠っているのに対し、流布本は、王威に直面すれば畏れ入りはするが、鎮西や離島の辺域においては意のままに振舞うという、二面的な為朝像を造型せざるを得なかった。」とも指摘する¹²⁾。王権の秩序と価値観に属すと同時に収まりきらないという性質は、戦後の為朝解釈の重要な論点となったが、大西蔵書で紙片が挟み込まれていた巻之一「新院御所各門々固めの事附軍評定の事」にもその要素が見られる。

左府即ち、「合戦の趣計らひ申せ。」と宣ひければ、畏まつて、〔…〕或は敵に囲まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を亡ぼすにも、皆利を得る事夜討に如く事侍らず。然れば、唯今高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は、火を通るべからず。〔…〕と、憚る所もなく申しければ、左府、「為朝が申す様以ての他の荒儀なり。年の若きが致す

所か。夜討などいふ事、汝等が同土軍、十騎二十騎の私事なり。さすが主上上皇の御国争ひに、源平敷を盡して、両方にあつて勝負を決せんに、無下に然るべからず。其の上南都の衆徒を召さる、事あり。〔…〕と仰せられければ、為朝上には承伏申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、「和漢の先蹤朝廷の礼節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をは、武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。義朝は武畧の奥義を極めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候らん。〔…〕敵勝つに乗る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しき事かな。」とぞ申しける。

為朝の予想通り、源義朝・平清盛など後白河天皇方の軍勢は深夜・寅の刻に内裏に押寄せせる。「白河殿義朝夜討に寄せらる、事」の節は、「為朝が千度申しつるは爰候々々。」と忿りけれども力及ばず。」と、皇室の面子や寺社勢力等とのしがらみにこだわつた左府の判断ミスを非難する為朝の様子で始まる。上皇方は、為朝を奮起させようとその場で彼を蔵人に任ずるが、「人々は何にも成り給へ。為朝は今日の蔵人とよばれても何かせん。只本の鎮西八郎にて候はん。」と、危急の場において官位や肩書は無意味であると一蹴した。

先にも参照した松尾葦江の論文では、慶長年間に古活字本が出た流布本には「近世の武家社会の関心に対応するという、時代的使命」があり、「流布本世界の秩序では、王威は重んじられなければなら」ず、古態本と比べて為朝像も制度の枠内に「常軌内化」されたと指摘されている。確かに、京における為朝の「宣旨」「院

宣」重視（巻之二「白河殿攻め落す事」）や、「勅命を背きて終には何の詮かあらん。」と自害する巻之三「為朝鬼が島に渡る事並最後の事」といった、松尾が特に注目する場面を見ると、その傾向は確かにみられよう。だが、一方で先の夜討をめぐる二つの場面では、為朝はまだ権威者の虚栄を批判する余地を残している。まさに「二面的」と言わざるを得ない人物像である。

為朝の「皆利を得る事夜討に如く事侍らず」と対応する大前田の発言は、たとえば、第二部第四の五の「殺して分捕るが目的の戦争に、〔…〕殺し方・分捕り方ののええも悪いも上品も下品もあるもんか。そげな高等なことを言うとなら、あられもない戦争なんちゆう大事を初手から仕出かさにやええ。いまごろそげな高等なことは、大将にも元帥にも誰にも言わせやせんぞ。」であろう。大前田は一兵士として、戦争の中で掲げられる「善」を信用せず、ただ殺す／殺される、奪う／奪われる場であるという即物的な認識をはつきりと語る。そして、それに異を唱えて登場するのが、青年将校・村上少尉である。

村上少尉は「殺して分捕る」を目的とする¹⁴とき戦争指導者、戦闘行動者が万一あつたならば、彼らは、歴代上御一人の御意思にそむき日本古来の武士道に悖る奸賊、破廉恥漢として、誅戮されるに値するのだ。」と「聖戦」論を述べる。だが、先の大前田の戦争論と照らしあわせて、東堂は村上のいう「日本古来の武士道」が誤つた認識であることに気づく。

〔…〕「日本古来の武士道」に関する村上少尉の主観的表象がどのようなであろうとも、その彼の主要な客観的立脚体は、

直接には「勅諭」ならびに「戦陣訓」であり、間接には江戸時代の儒学的理念武士道である、と私は推断することができ。ここで初めて私は会得するが、村上少尉の弾劾にもかかわらず、大前田演説の内容的性質は、むしろなかなか「日本古来の武士道」に叶っているのである。

——近世以前の伝統的実践武士道と、近世の理論化せられた体系化せられた儒学的理念武士道とは、その態様が、だいぶ異なるっていとみえる。前者は、少なくとも前者の重要な半面は、あるいは当代の武士自身が「武者は犬ともいへ畜生ともいへ、勝事が本にて候事。」と宣言したように、〔…〕すこぶる野生活力的・大前田演説的なのであった。

すなわち、村上少尉の「武士道」は乱世の過ぎた江戸期以降、社会の階層秩序を守る目的において形成されたもので、いわば「伝統」を偽装しているという指摘である。これは戦後の日本思想史研究においてもみられる見解で、たとえば古川哲史は「武士道の思想とその周辺」の中で、近世の儒学者が発展させた「実際存在したものでなく、ただ頭で考えられた一種の道徳的理想にすぎなかった」思想を「士道」として、主に戦国時代に「実際存在した武人の道を背景として自覚形成された「武士道」と區別して論じた。また為朝や悪源太らの「弓矢とる身の習」については、「士道」の側から理想化される一方、その実「武士道」と近い面もあったと指摘している。この古川の著書は、一九六〇年発行の第三刷が大西巨人旧蔵書に含まれていた。多くの葉と傍線が確認でき、また発行時期も『神聖喜劇』発表開始直後と重な

ることから、当時の大西がこの「儒学的理念武士道」「伝統的実践武士道」の対立に強い関心を寄せ、本書での整理を直接の参考にしてきた可能性は高い。

「士道」と「武士道」の対立は、「殺して分捕る」という戦争観の是非をめぐる、大前田と村上少尉の間の静かな対決にスライドしていく。村上少尉による、軍刀を腰から外して杖つき、大前田の方に一歩進み出るといふ、いささか劇的な所作から東堂が連想したのは、『保元物語』ではなく『平治物語』の悪源太義平と平重盛の紫宸殿での一騎打ちだった。

百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、悪源太弓をば小脇に掻い挟み、鎧ふん張りつい立ちあがり、左右の手を挙げ、『幸ひに義平源氏の嫡嫡なり、御邊も平家の嫡嫡なり。敵には誰か嫌はん、よれや組まん。』といふ儘に、先の如く大庭の椋の木の下を追ひまはして、五、六度までこそ揉うだりけれ。

重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へ引いて出づ。この、引用一覧表の中の場面Dは、『保元物語』と同じく、佐伯常麿校註『校註 日本文学大系 第十四卷』に収録された流布本『平治物語』に依っている(ただし『校註 日本文学大系』で「鎧ふん張りつ、」と起こされた箇所が、『神聖喜劇』では「鎧ふん張りつ」と直されており、別の資料も見た可能性がある)。ここでは悪源太に大前田軍曹が、平重盛に村上少尉が比され、軍隊の階級上では隔たりの大きい両者が、まったく対等に向かい合っている——むしろ大前田が優勢にみえる——ことを効果的に印象付けている。

悪源太重平の引用はこの場面だけだが、これに特殊な意味を見

出すよりは、他の為朝引用のバリエーションとして考える方がよいだろう。というのも、「信西子息闕官の事附除目の事並源太上洛の事」における悪源太は、「保元に叔父鎮西八郎為朝を、宇治殿の御前にて藏人になされければ、急々なる除目かなと、辞し申しけるは理かな。」と自ら為朝を引き合いに出し、また平清盛を阿倍野で急ぎ討ち取るという彼の「荒儀」な発案が藤原信頼に却下されたために、自軍が勝利を失うという流れも『保元物語』の夜討をめぐる経緯を踏襲しているなど、原典の段階で両者の繋がりが強く意識されているからだ。先行研究上でも、「為朝も義平も、それぞれ保元・平治の両物語を代表する模範的英雄として登場している。」等と、両者を「英雄」の例として並び称することは一般に行われている。

一方の平重盛は、「六波羅より紀州へ早馬を立てらる、事」で藤原信頼・源氏軍の挙兵を知って動揺する父清盛に対し、多勢に無勢でもすぐに京都に戻るほうが「後代の名も勝るべけれ。」と進言するなど、冷静でありつつ名譽を重んずる人物像である。補足的に見るなら、後代の『平家物語』でも、重盛（小松大臣）は鹿ヶ谷事件の戦後処理で、叛徒の増加を危ぶんで藤原成親の死罪に反対したほか、重病を得た折には宋国の名医にかかれという清盛の勧めを「国の恥」と拒んで、漢の高祖の故事を引きつつ天命には従うべきであると述べている。重盛の死にあたって、地の文は「文章うるはしうして、心に忠を致し、才藝すぐれて、言葉に徳を兼ね給へり。」と高い評価を与えているが、文武両道・国家秩序の担い手としての自負などは村上少尉の人物像とかなり合致するも

ので、『保元物語』よりも重盛が登場する『平治物語』がこの場面 で引用に選ばれた一因であるかもしれない。

さて、村上少尉と対峙する大前田は、語気を抑えつつも「——ただ、教官殿も、戦地に出られましたら、少しやまた別のお考えになられるとかもしれません。」と言い、「聖戦」論には最後まで同調しない。ところが村上少尉は、「負けるために戦争をする軍隊は、どこにもない」「次ぎの南方戦場では、おそらく落命するであろうことを覚悟している」「いのちの限り、当たるをさいわい、全力を傾注して、敵を撃滅しつづける」などの大前田自身の発言を一つずつ確認し、「大前田も村上も、共に畢竟おなじ志、おなじ行く先、おなじ死に場所だ。」と、大前田の「大異見」をあえて無視したような態度をとる。そして当の大前田も、それに不満を見せず、「聖戦」の欺瞞を知りながら一兵士として戦争に参加することを、当然のこととして受け入れ続けるのである。

この場面の後、鉢田二等兵・橋本二等兵らに対して「皇国の戦争目的」を理解したか問うた村上少尉は、彼らが「皇国」の言葉としての意味さえ理解しておらず、さらに戦争目的を「殺して分捕ることでありませぬ。」と悪意なく答える様子に唖然とすることとなる。鉢田らが發揮した大義名分を破壊する言葉の力を「直言」と名付けた井口時男は、大前田軍曹もまた「直言」の人であると論じた¹⁵⁾。しかし大前田が、鉢田・橋本のように村上を圧倒することができず、最終的に戦争の論理に回収されたのは先に見たとおりである。なぜそのようなになるのか。引用一覧表の場面Cを手がかりに考えてみたい。

場面Cでは、『保元物語』で崇徳上皇方の敗北が決まった後の源氏掃討の数々が引用されているが、特に源為義の幼い四子が自害する直前、最年長の乙若が「今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。」と言う箇所が注目されている。語り手＝東堂は次のように語る。

〔…〕現代の実戦者大前田が農民であるように、発生期の武士もまた農耕者であった。「耕スコト山腹ヨリ山嶺ニ至ル、貧ノ極ナリ。耕ザザルコト山腹ヨリ山嶺ニ至ル、亦貧ノ極ナリ。」というような内容を実際的に語った大前田の叫びの中に、中世初期武士集団の土地に対する本源的な「一所懸命の」愛染の悲しみが、数百年の時の動きを超えて尾を引いていたかのように、私に顧みられたのであった。そしてそれよりもさらに切実に私に感ぜられたのは、〔…〕過去と現在と国内的と国際的との別なく戦争戦地戦闘一般の現実においては、〔…〕大前田文七が「殺し方のよし悪しを詮議しとる必要はない。」と断じたような「日本古来の武士道」の否定的要約が、必然不可避普遍的に顕現せられてきたのではないか、〔…〕ということであった。

いずれ生活は苦しいが、とりわけ敗北し土地を失えば、「乞食流浪の身とな」るのみという生活に根ざした危機感が、大前田軍曹の中に見出せる。「万が一、途中で形勢が悪うなつて、敵が内地に攻め上がるちゆうごたあることになつてみる。日本人大ぜいが毛唐の軍隊からどげなあつてあられんごたあるめずらしい目に会わせられるか、考えるだけでも、おれはぞつとする。」〔第二部

第四の五）という、死と報復をめぐる他者＝敵への恐怖と不信の前では、処世術として「いのちの限り、当たるをさいわい、全力を傾注して、敵を撃滅しつづけ」ざるを得ず、「聖戦」の大義名分を嘲笑しながら、優秀な兵士の役割に回収されていくのだ。

大前田の戦争・軍隊に対する不満は、愚痴という形で表れる。第二部第三の二で、大前田は村崎古兵と猥談的表現を交えながら、田舎に残された妻が性的にも経済的にも不如意だろうと語り合い、「さあ？ 誰を恨みやよかろうかねえ。村崎。」とこぼす。「すこぶる息の合った両者の掛け合いは、だんだん羽目をはずして危険思想を加味するかのようであった。」と東堂は会話に注目するが、二人はそれ以上話題を進めなかった。同章の四で、『満期操典』について考える東堂は、「兵隊歌には軍隊への怨嗟嫌悪が籠められてはいるけれども、その基調は、庶民の受動的諦観、弱者の消極的つぶやきに留まって、何物かへの積極的・能動的な叫びとはなっていないようである。」と、ガス抜きとして見逃された厭戦的兵隊歌の限界を指摘する。だがその時、東堂は先の大前田と村崎の「無駄話」を思い出す。

私は、兵隊歌について概略そのような感想を持ったが、ただ一月下旬の一夜、大前田と村崎とが掛け合いで「満期すりや起床喇叭もニワトリの声」以下を引用したときには、ある能動的な潜勢力のきらめきをそこから感受しなくもなかった。消極的な怨嗟嫌悪が、ある条件の下では積極的な反抗反逆に転化するかもしれないか。

この「能動的な潜勢力」の詳細や、また「ある条件」が何であ

るのかは、小説では明示されていない。ただ印象的なのは、「満期すりや起床喇叭もニワトリの声」に象徴される「危険思想」が、非常に個人的かつ根源的な恋愛をめぐる話題の中で特に発露していることである。このことに留意しつつ、次節では、『神聖喜劇』の先行研究で分析されなかった、結末の第八部で大前田が辿ったいささか奇妙な道行きについて考察を進めていく。

三、現代の落人となること

——境界としての炭焼き小屋

前節までで見てきたように、大前田軍曹は保元・平治の乱の時代の半農武士を想起させる、名よりも実を取る生活者でありながら、その現実主義が反転して生き残るために「敵」の殺害を当然としてしまうために、戦時における国民国家の論理に回収されてしまう存在でもあった。

しかし、結末の第八部第四の後半に至って、大前田の立場は思いがけない「辱職ノ罪」「逃亡ノ罪」によつて一転する。その四の1のエピグラフとして引用されているのが、『保元物語』の「為朝生捕り流罪に處せらる、事」である（引用一覽表G）。

さるほどに、「為朝を擲めて参りたらん者には、不次の賞あるべし。」と宣下ありけるに、八郎、近江国輪田といふ所に隠れ居て、郎等一人法師になして乞食させて日を送りけり。筑紫へ下るべき支度しけるが、平家の侍筑後守家貞、大勢にて上りければ、そのほど昼は深山に入りて身を隠し、夜は里に出て食事を営みけるが、有漏の身なれば病み出して、

灸治など多くして、温疾大切の間、古き湯屋を借りて、常におり湯をぞしける。

爰に佐渡兵衛重貞といふ者、宣旨を蒙りて、国中を尋ね求めける処に、ある者申しけるは、「このほど此の湯屋に居る者こそ怪しき人なれ。大男の恐ろしげなるが、さすがに尋常げなり。歳は二十許りなるが額に創あり、由由しく人に忍ぶと覚えたり。」と語れば、九月二日湯屋に下りたる時、三十余騎にて押し寄せてけり。為朝真裸にて杖を以て数多の物をば打伏せられたれども、大勢に取籠められて、云ひがひなく搦められにけり。

味方の敗北のために落ち延びていた為朝が、土地の人と思われる「ある者」の通報によつてついに追捕される場面である。この引用からまもなくして、大前田軍曹は面天奈火薬庫衛戍勤務中に、かねてから深い仲だった「元ミス竹敷」と構曳したことが巡察將校に知れそうになり、実包（彈薬）と食料を持ち出して行方不明になる。「逃亡の罪」が成立する三日以上を経過した後、大前田は捜索隊に逮捕されたが、山中に身を隠し、「地方人」（軍隊外の一般住民）の「報知」によつて追手に見つかるといふ経過は、明らかにエピグラフに引かれた『保元物語』との類比が意図されているだろう。この直前、第五部～第七部にわたって長らく影を潜めていた大前田が為朝の構図が、引用一覽表のFの射撃訓練場面によつて再度提示し直されていることも、逮捕場面における類比をより強調している。

一方で、この場面Gおよび以降の逃亡事件の顛末では、他の引

用場面に比べて、大前田軍曹と『保元物語』との間の要素のズレがはつきり立ち現れているようだ。例えば『神聖喜劇』では、大前田の隠れ場所は『保元物語』の「深山」のような漠然とした示され方ではなく、「遠見岳山中の空炭焼き小屋」と具体的にであり、なおかつ捕縛される前から、村崎古兵が「どっか山の奥の空いとる炭焼き小屋にでも潜り込んどるとじゃなかるうか。」という予想を東堂に語る場面が挿入されるなど、炭焼き小屋という場が読者に強調されている点に気づく。

この「炭焼き小屋」は、対馬においてどのような場所であり、そしてどのような意味を持って作中に導入されているのだろうか。大西巨人旧蔵書の中からは、対馬の歴史風土に関する文献も複数見つかったが、その中で炭焼き小屋の記述を確認できたのは、湯浅克衛『対馬』（出版東京、一九五二年二月）と兼元淳夫『海の国境線』（富士書苑、一九五四年七月）の二冊である。特に湯浅の『対馬』は、六一頁「炭焼き小屋の信号」の節に葉代わりの小紙片が挟み込まれており、参考にした可能性が高い。該当部分を引用する。

この町（引用注・鶏知町）は東海岸にも高浜という港をもち入海の浅茅湾に沿つて樽ガ浜、久須浜の港をもつ。浅茅湾をたどつて二時間ほど船を走らせれば、西海岸に出て、ここからはすぐ向いの朝鮮に直線コースがとれる。したがつて、戦後、こゝは密輸、密航の基地としてにぎわつたものだつた。

〔…〕
〔…〕
〔…〕ただしこの二カ所（引用注・鶏知町と琴村）とも背後

に密林を控えているので、密航して来た未登録の者が、相当山の中にかくれている模様なのである。

山の中に炭焼き小屋がある。炭焼きの朝鮮人は十三、四から十五、六の、まるで子供のような嫁さんをもつて暮らしている。炭焼き小屋の人は正業についているので、密輸の対象にはならないのだが、それでもよく大阪やら博多などから、大きな小包がとゞくのである。そして、それらしい船が海上に現れると、炭焼き小屋の灯がバツとついたり消えたりする。

朝鮮からの密航船は、その信号を見て、警戒の模様を知り、船を接岸させていゝか、上陸していいかを判断するのである。〔…〕⁽¹⁹⁾

また、兼元の『海の国境線』では巻頭口絵に「密航の表情」と題した写真ページがあり、キャプションの一部に次のような記述がある。

全島が密林に覆われ、一步奥へ入ると道路は消えている。隠れるための条件として、こんな好都合はない。しかも無数の炭焼き小屋が、逃げる身を風雨や、監視の眼から、かくまってくれる。密航者があとを断たない理由は、朝鮮に比べて、やはり日本の灯が恋しく暖かいことにあるが、密航の便となる対馬の地理的な条件も併せ考えねばなるまい。⁽²⁰⁾〔…〕

同書本文四八頁にもほぼ同内容の記述がある。これらから、山中の炭焼き小屋が、密航当事者および支援者の朝鮮人たちの拠点というイメージの色濃い場だったことがわかる。これらは戦後の状況だが、宮本常一「対馬——その自然とくらし——」⁽²¹⁾にも「こ

の島にはもと朝鮮人が多かった。この人びとは山中に入って炭焼をしていた。対馬は雑木がよく茂る。そこで炭焼には適しており戦前はそれを朝鮮におくっていたが、「など」とあるため、『神聖喜劇』作中時間にあたる一九四二年初頭～春においても、対馬の山の木炭生産と大日本帝国の中のマイノリティである朝鮮人は結びついていたはずである。

以上のような背景と、人里を離れた立地からみて、対馬の山の炭焼き小屋はいわば大日本帝国の秩序が曖昧化する境界的な場として作中で機能させられている。そして、そこに逃げ込んだ大前田は、為朝のような味方の敗戦によってやむなく落人となった武人ではなく、恋愛というもつとも私的なきっかけから、公Ⅱ大日本帝国から与えられた職責を離脱した個人である。ここにおいて、大前田の「二面性」は、封建秩序の中に回収された「英雄」から、逸脱する個人の方へ重心を移すのだ。

もうひとつ注目したいのは、枋（天秤棒）だけで多くの追手に抵抗した為朝と異なり、「さいわいに（たぶんさいわいに）大前田軍曹は、小銃を撃たなかった（撃つ隙がなかった）」、つまり追手を死傷させなかったことが明示されていることだ。この時点で、「敵と名のつく奴たちにな、どいつにもいつにも仮借はせん。」と豪語した第二部の大前田から、あり方が変容しているようにも思われる。その傍証となりえるのが、第八部第三で起こる「模擬死刑」事件をめぐる大前田の振る舞いである。

演習砲台での特別休養の間、民家から鯛鳥賊を盗んだことを咎められた末永二等兵は、仁多軍曹、田中軍曹らの悪質な悪ふざけ

——偽の死刑命令で恐怖させる——の標的になる。最初は共に面白がっていた大前田軍曹だが、仁多らの行いがエスカレートしかけるとその場を離れ、事態が終わるまで戻らなかつた。様子を見ていた白水二等兵は、東堂に「ちよつと上つ面だけで考えると、こげなことにヤエズウ（たいそう）乗り気になりそう大な前田班長が、いっちょん気が進まんごととして、そっぽを向いとつたぞ。」と言つて不思議がる。さらに、仁多軍曹らに異議を唱えた東堂ら五名の兵士が処罰されて事件が幕引きになった後も、大前田は東堂らに対し「総じて何事についても意地悪、いやがらせ、当て擦りなどをしも言ひもしなかつた」。大前田が「模擬死刑」に加わらなかつた理由や事件後の態度を解釈することに、東堂は慎重であるものの、この第八部では大前田が軍隊の構造に基づく不条理な暴力の担い手とならないのは興味深い点である。

本稿第二節でみたように、大前田が戦争での殺人・暴行を当然視するのは相手が「敵」であり己に危害または損害を与える存在であるから、というのが基本である。末永の「模擬死刑」は、まずそれに該当しない残酷な行為といえ、大前田が場を去つた動機もあるいはそれに求められよう。さらに、この事件では冬木二等兵が、鉄砲は「天向けて」も撃てるのだと、「敵味方を問わずあらゆる人間にたいして鉄砲・兵器を用いるつもりは彼にない」ことを上官の前で言い切る場面がある。これは大前田が第二部で主張した「戦争で敵を殺したちゆうあたりまえのこと」が、実は「あたりまえ」ではないのだという言表である。先述のように、大前田はこれを否定も肯定も直接にはしなかつたが、逃亡した大前田

が「小銃を撃たなかった」のは、それが冬木の発言の残響の中にあるからではないか。

かくして捕縛という形で鶏川重砲兵聯隊を去る大前田だが、「終曲」で記された「小倉陸軍刑務所における長期服役の判決」からみて、彼は敗戦まで戦場に出ずに生き残った可能性が高い。

性愛をめぐる陸軍刑法という秩序を逸脱したことで、結果的にはあるが、大前田は一九四二年春以降は戦争で「殺して分捕る」ことを免れただけでなく、最大の関心事である自身の生命の保護にも成功したことになる。²³ 第八部第四の四の2で大前田が捕まる直前の、「面天奈」という名の地域海城すなわち面天奈火薬庫近辺は、それほど（私の想像ほど）には凄絶な「奈落」でも蕭条たる「地獄」でもなかった。」という東堂²⁴語り手の感慨も、大前田の逃亡を積極的に捉えているようである。そして引用一覧表の場面Eでは、大前田は次のように為朝について「なにさまうれしげに力んで述べて詠歎」する。

「そう言や、鎮西八郎為朝も、伊豆の大島じゃ死なじに、沖繩に行つて王様になつたとじゃの、〔…〕気色のええ話が、ようあるのう。そげな特別の人たちや、なかなか簡単にや死なるとかもしれんぞ。ううむ。〔…〕」

この「貴種流離譚」は対馬の豆蔵が「平家の落人の部落」という言い伝えを大前田が思い出したことから連想されるのだが、武将が生き残る伝説を「気色のええ話」と喜ぶ一幕が、引率外出前に対馬女性についての性的な話題を交わす中で突然に挟み込まれるのが特徴的である。大前田は古典的な「特別の人」ではありえ

ないが、『保元物語』には導入されようのない性愛という要素によって、最後に不意に個としての在り方を顕在化させ、現代の「落人」として生残したようにも見える。この後、さらに話題は大前田と戦地を共にした広田伍長が妻の不倫問題で突然自殺したことに流れ、大前田は「この外泊禁止が広田を殺したとじゃ。」と軍隊の不自由さについて静かな怒りを露わにする。やはり、個の生/性の顕在化と軍隊批判・秩序離脱は微妙な形で連関しているといえよう。

『神聖喜劇』における大前田軍曹は、制度と反骨の狭間にいる「英雄」源為朝のイメージをなざること、村上少尉に象徴される「聖戦」理念を批判しつつも回収される、「伝統的実践武士道」を背負う登場人物となった。しかし第八部第三で、冬木二等兵の「天向けて撃たれます」発言によって「戦争で敵を殺したちゅうあたりまえのこと」という「伝統的実践武士道」の論理が相対化されたあと、大前田は『保元物語』の世界から排された生/性の欲求の介入によって、急激に制度から逸脱していく。かつて第二部第三の四で東堂が大前田の「猥談」——性愛にまつわる言動において看取した「能動的な潜勢力」は、小説の最後において「武士たるもの殺業なくてはかなはず」という戦争における「実践的」論理への「積極的な反抗反逆」につながったのだ。

このような大前田の作中における道行きは、法の運用と言語で知的に抵抗する東堂とは別の経路による、個を実現する運動の表現形態として立ち現れているのである。

*本稿の『神聖喜劇』本文引用は、著者が「今日における決定版」とした
光文社文庫版全五巻（二〇〇二・七―一）による。

*本稿は二松學舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト「現代文学芸術運動の基礎的研究——大西巨人を中心に」の成果の一部である。

- 注1) 小田切秀雄「一匹の犬」と剛直な魂——『神聖喜劇』——（『すばる』一九八〇・一二）
- (2) 日高晋「『神聖喜劇』のおもしろさ」（『新日本文学』一九八〇・九）
- (3) 大西巨人「『神聖喜劇』を書き終えて——全五巻刊行後約三ヶ月の日に」（『新日本文学』一九八〇・九）
- (4) 篠田一士「『神聖喜劇』の主題」（『新日本文学』一九八〇・九）
- (5) 柴原丈和「軍隊と身体——「挟み撃ち」あるいは「神聖喜劇」」（『近畿大学日本語・日本文学』二〇〇六・三）
- (6) 石橋正孝「大西巨人における暴力の問題」（『大西巨人 抒情と革命』所収 河出書房新社 二〇一四・六）
- (7) 立野正裕「兵士の論理を超えて」（『精神のたたかい 非暴力主義の思想と文学』所収 スペース伽耶 二〇〇七・六）
- (8) 立野正裕「日本庶民兵士の二重性」（『精神のたたかい 非暴力主義の思想と文学』所収 スペース伽耶 二〇〇七・六）
- (9) 『神聖喜劇』第八部第一のエピグラフに用いられた太田錦城「樞窓漫筆」後編の引用にも『保元平治物語』の名があるが、直接的な引用でないため除外した。
- (10) この調査は、二〇一四年三月二日の大西巨人死去をうけ、大西研究の先駆である二松學舎大学教授・山口直孝氏が、遺族の許可を得て、一時的に旧蔵書を二松學舎大学柏キャンパスに移し、書き込み等の確認と目録作成を行っているものである。二松學舎大学から三年間の研究助成を受け、橋本も研究分担者として参加している。
- (11) 学術的な例では、五十嵐力「軍記物語研究」（早稲田大学出版部 一九三三・三）の冒頭の「発端」で『保元物語』の為朝の場面が解

説され、文体の評価とともに「最初に描かれた武家時代初期の巨人」「個の英雄児」「無意識の中に當時の武人を代表してゐた為朝」といった為朝評がみえる。通俗的な例では、大町桂月「少年文学 日本人の弓矢」（至誠堂 一九一四・九）で、やはり巻頭解説の後の最初の読み物として「源為朝」が収録されており、「曰く為朝は日本武士の最好の標本なり」と締めくくられる。

- (12) 松尾葦江「流布本保元物語の世界」（『軍記物語研究叢書3 保元物語の形成』所収 汲古書院 一九九七・七）
- (13) 戦後の為朝像をめぐる研究動向は、樋口大祐「為朝論の系譜とその変遷——国民的英雄像を超えて——」（『軍記と語り物』二〇〇六・三）を主に参照した。
- (14) 山路愛山は「為朝論」（大久保利謙編『明治文学全集35 山路愛山集』所収 筑摩書房 一九六五・一〇）で、「彼れは人為に對して反抗したる自然の児なり。」「様々に粧飾したる偽文明を冷笑する野蠻の児なり。」等と評しており、大前田が村上少尉的な「聖戦」論に反発するさまと重ねて読むことができる。なお大津雄一が『平家物語』の再誕 創られた国民叙事詩（NHK出版 二〇一三・七）で、山路の論から「高貴な野蠻人」とヨーロッパ・ロマン主義特にハインリッヒ・フォン・クライストとの関連を指摘しているが、フォン・クライストは『神聖喜劇』第三部第一の一で村上少尉の愛好作家として言及されるなど本稿で扱いきれない問題を含むため、今後改めて検討したい。
- (15) 古川哲史「武士道の思想とその周辺」（福村書店 一九五八・四・初版、一九六〇・一〇・三刷）
- (16) 古川哲史『英雄と聖人』（福村書店 一九五八・四）
- (17) 井口時男「正名と自然——帝国軍隊における言語と「私」」（『患文の初志』所収 講談社 一九九三・一一）
- (18) 大前田の「大異見」が皇国秩序に回収される構図は、大津雄一が「為朝・崇徳院考——王権の〈物語〉とその亀裂——」（『軍記と語り物』一九九一・三）で指摘する「為朝の危険性は〔…〕共同体の

健康を維持して行くための程よい危険性に過ぎない。」とも重なる。

(19) 湯浅克衛『対馬』(出版東京 一九五二・一二)

(20) 兼元淳夫『海の国境線』(富士書苑 一九五四・七)

(21) 『宮本常一著作集第5巻 日本 島の離島 第2集』(未来社 一九七〇・八) 収録。

(22) 第八部第四の三の7で、大前田が東堂に六四回以上ものピンタを喰らわせる場面があるが、これは軍隊の規定を利用する東堂の闘い方を逆手に取って、うっかり規定違反をした彼の脇の甘さを突いたという流れになっており、区別して考えるのが妥当である。

(23) ここで残る課題として、大前田が生き残ったと思われるのに対して、構曳相手の「元ミス竹敷」は自殺という形で犠牲になったことの意味と、性愛による軍隊秩序からの離脱について、恋人との即物的な性交により一等兵が兵営の外へかかる「虹」を幻視する『真空地帯』との比較などがある。『神聖喜劇』の女性表象の問題については稿を改めて考察したい。

(24) 為朝が琉球王の祖となった伝説については、大西巨人旧蔵書のうち、『日本随筆大成 第六巻』(吉川弘文館 一九二七・九) 収録の伊藤東涯「秉燭譚」、『日本随筆大成 第二期二巻』(日本随筆大成刊行会 一九二八・六) 所収の西田直養「笹舎漫筆」、『日本随筆大成 第三期一〇巻』(吉川弘文館 一九七七・六) 所収の土肥経平「春湊浪話」における掲載ページにそれぞれ「為朝」「春湊浪話」は「タメトモ」とメモした小紙片が挟み込まれており、関心の深さが見て取れる。また「椿説弓張月」については収録本である後藤丹治校註『日本古典文学大系60・61』(岩波書店 一九七四・一二、一九七五・六、いずれも一一刷)が確認できた。

引用一覽表

G	F	E	D	C	B	A	
第八部第四の四の1 エピグラフ	2 第八部 第四の二の	第四部 第四の(3)	第三部 第三の一		第二部 第四の五	第二部 第四の五	『神聖喜劇』引用箇所
大前田の兵營脱走事件が発生	野砲操作訓練時の大前田の姿を東堂が回想	大前田が落人伝説の話から為朝に言及	大前田と村上少尉の戦争観が対立	東堂による大前田演説の分析	大前田が戦場体験と戦争観を語る	大前田が戦場体験と戦争観を語る	場面の概略
『保元』巻之三「為朝生捕り流罪に處せらるゝ事」	『保元』巻之二「白河殿義朝夜討に寄せらるゝ事」	直接引用なし(『保元』巻之三「為朝鬼が島に渡る事」並最後に「事」に関連)	『平治』巻之二「待賢門の軍附信賴落つる事」	『保元』巻之二「為義最後の事」、同「義朝弟共誅せらるゝ事」、巻之三「義朝幼少の弟悉く失はるゝ事」	『保元』巻之一「新院御所各門々固めの事附軍評定の事」	『保元』巻之一「新院御所各門々固めの事」 卷之三「為朝鬼が島に渡る事」並最後に「事」	『保元物語』「平治物語」の被引用節
官旨による落人為朝の捕縛と、憲兵による脱走兵大前田逮捕の重ね合わせ	大前田の十五加発射動作の見事さを、山田小三郎伊行との戦での弓射と重ねあわせ美的に賞賛する	「為朝伝説」を「うれしげに力んで」「詠歌」する大前田の描写で、両者の親近性を印象づける	大前田を悪源太義平、村上少尉を平重盛に置き換え、対等な存在としての対峙と大前田優勢を暗示	「聖戦」化された「現代日本の戦争実行」を、戦とは農耕者でもある中世武士にとって生活の為の土地の保全／奪取行為だったという観点から相対化	大前田の「屈強な立ち姿」の強調	戦場において「敵」を殺すことと「正当化する」「言いつ分」＝「非分の者を討たず」を印象づける	小説における効果